COMDEXのLinux
ビジネスの世界に躍り出たオープンソースOS

11月，米ラスベガスで開催された「COMDEX/Fall」では，前年に引き続きLinux専用ブースが併設された．COMDEX自体が「Linux Business EXPO」との共同運営という形をとっている．最近のCOMDEXにはIBM，コンパック，アップルなどの大手企業が参加せず，Windows一色の，さながらマイクロソフトおよびビル・ゲイツのプライベートショーの感が強まっていた．その世界にオープンソースのLinuxが昨年に続いて進出，確実にその地位を高めてきていることを伺わせた．しかし，それとともにLinux自身の商業主義が目立ち始め，フリーOS，Linuxの行く先を案じる声も聞こえてきている．COMDEXという世界最大のコンピュータショーの主役になろうとしているLinuxは，大きな曲がり角を迎えているようだ．

（株）テラメディア　宍戸 周夫

○様変わりするCOMDEX

最近のCOMDEXは，メイン会場正面入り口にマイクロソフトが大規模なブースを構え，さながらマイクロソフトのための展示会という感が強まっていた．全体の傾向を占う意味で重要な最初のキーノート・セッションもビル・ゲイツが例年務めており，これに詰め掛ける満員の観客は彼のコメントやジョークに拍手歓声をするのが恒例となっていた．

しかし1999年は，COMDEXが正式スタートした翌月曜のキーノートからは異色のタレントの登場が相次ぎ，今年オープンしキーノートの新会場となったベネティアン・ホテルのボールルームはビル・ゲイツ以降も毎回満員の盛況となった．

月曜朝のキーノートに立ったのは，ヒューレット・パッカード（HP）の女性CEO，カーリー・フィオリナ．正午からはソニーの出井伸之社長，そして夕方6時半からにはいまやビル・ゲイツの天敵のような存在となったLinuxの生みの親，ライナス・トーバルスという面々であった．いずれも，ビル・ゲイツとは好対照を示すCOMDEX初登場のタレントたちだったが，特に初日夜のライナス・トーバルスのキーノートはCOMDEXに新しい流れが誕生したことを十分予感させるものだった．

○異色のタレントたち

最初に登場したHPのカーリー・フィオリナは，「企業のITで重要なのはテクノロジーではなくカルチャーである」などと主張するとともに，自社の次世代コンセプトE-serviceを構成する製品群を説明，さらにインフラを構成するシンプルでファミリアなデバイス，EPCコンセプトの紹介などを行った．キーノートでは一貫してこれまでのコンピューティングとの違いを強調していたし，EPCは明らかにマイクロソフトが作り上げてきたPCの世界の否定ととれる．

昼に行われたソニーの出井社長のキーノートは，日本人がCOMDEXのこのステージにはじめて立ったという点で画期的な出来事だった．出井社長は，これからのインターネットとブロードバンドの世界にソニーが強みを発揮する決意を観客に語りかけた．オーディオとテレビ，PC，そしてプレイステーションによるPower Hardware Networked Societyがソニーの目指す道．ゲストとしてビル・ジョイやジョージ・ルーカスもステージに呼ぶなど，ソニーがCOMDEXにかける意気込みが伝わってきた．スピーチの中ではこれまでのPCはナローバンドの世界だが，これからはブロードバンドでなければならない，というように現在のPCの限界を示す発言もあった．マイクロソフトの路線とは異なる新しい世界だ．

そして，初日夕方6時半からの最後のキーノートに現れたのが，ライナス・トーバルスである．彼のキーノートには明らかにLinux信奉者が大勢詰め掛けていた．主催者の挨拶やトーバルス自身のスピーチでビル・ゲイツに若干でもふれるような部分があると，会場からは大きな歓声や拍手が起きた．ときおり聞こえる，最前列にいたトーバルスの子供がむずかる声も，これまでのキーノートにはないものだった．

彼はオープンソースがもたらすインパクトについて淡々と，そして少しはにかみながら話したが，1時間のスピーチの半分はQ&Aに当てた．これもこれまでのCOMDEXのキーノートにはない風景だった．しかしこのあたりで，席を立つ人が次々と現れたが，これが何を示すのか．

ブースも大規模化

1998年，COMDEXにはじめて登場したLinuxは，サブ会場であるサンズ・コンベンションセンターの片隅に関連団体，企業が小さないくつかのブースを出展．しかしこの大きなショーで，専用のパビリオンが設けられたのは，Linuxの隆盛を物語る大きな出来事だった．いわば草の根OSであるLinuxが，商業主義の権化のようなCOMDEXの会場に，たとえ小さなブースばかりであったとしても一角を占めたのは画期的な出来事だったのだ．しかし1999年は，メイン会場のラスベガス・コンベンション・センター（LVCC）の一角に参加各社がそれぞれ大きなブースを展示するまでに成長した．キーノートもそうだが，ブースを見てもLinuxのビジネス世界への進出ぶりは明らかである．

昨年のLinux Pavilionと異なり今年のLinux Business EXPOでまず目につくのは，各ブースがそれぞれ大規模化しているということだ．レッドハット，VA Linux，Caldera，そしてかつてワードパーフェクトを買収して一躍有名になったカナダ最大のソフトハウス，Corelなどの大きなブースがEXPO会場内に並んだ．レッドハットにはIBM，インテル，コンパックなど，そしてVA LinuxにはSGIなど大手メーカが資本参加している．明らかに，Linuxを巡って大手資本によるビジネスが動き出していることを表している．

キーノートでもLinux専門の「Linux Business EXPOキーノート」が別個に行われ，15日の初日はレッドハットのロバート・ヤング，2日目はCorelのマイケル・コープランド，そして3日目はCalderaのラムソン・ラブ各CEOというLinux推進派が名を連ねた．もちろん，すでに紹介したようにライナス・トーバルスはCOMDEX初日夜のキーノートを務めている．Linuxの隆盛は疑いようがない．

ビジネスに興味のある人たちのLinux

しかし，Linuxへの注目が高まるにつれ，心配事も出てきている．Linux推進派の足並みの乱れといっては大げさかもしれない．しかしその市場が大きくなるにつれLinuxを担ぐ人たちが多様化し，それぞれの思惑がぶつかり合うような気がしてならない．

たとえば，Linux Business EXPO会場は明らかに開発者，技術者という雰囲気の人であふれ，まだまだ一部マニアのOSという感が漂っている．EXPO会場に入るのにも個別の登録が必要で，COMDEX恒例のネームバッチにLinuxのマスコット，ペンギンのシールを貼らなければならない．マイクロソフト・ブースがある一角とは異なり，展示の方法にもどうしてもLinuxマナーがある．一部では，オープンソースという本来の姿とは異なるマニア的な雰囲気が残っている．

しかしそのマニアの世界に，プロのビジネス集団が大挙して押しかけているという印象も強いものがある．ライナス・トーバルスは「わたしはビジネスには興味がない」というが，そのフリーOSの上でビジネスを展開しようと考えている人たちの姿が目立ってきている．

実際，Linuxを巡ってビジネスマンたちの戦いが始まっている．レッドハットはCOMDEXの開会に合わせたようにLinuxツールベンダであるCygnus Solutionsを買収したことを発表．同社CEOのロバート・ヤングはLinux EXPOのキーノートの中で「合併はコンピュータ関連のエンド・ツー・エンドのソリューションを統合することにある」と述べたが，明らかにLinux陣営の中で優位に立とうとする戦略だ．ほかにも，近々，エンタープライズ分野におけるLinuxの移植で，大手コンピュータベンダの資本参加も予定されている．こうしたビジネス戦争の中で，「Red Hat」と「Trubo Linux」の機能の乖離も気になるところだ．

CorelのLinux分野への本格参入も，これからのLinuxに影響を与えそうだ．同社会長のコープランドは，カナダでは「アナザー・ビリオネアー」と呼ばれ，ビル・ゲイツと並び称される人物．ビジネスとは無縁な技術者，コンピュータ・マニアのLinuxの世界に，明らかにビジネスに興味のある人たちが群がり始めている．

ライナス・トーバルスはキーノートで，「3年前には一生懸命オープンソースの利点を説明したが，あまり理解されなかった．しかし今は，オープンソースといえば，誰でもその利点を理解している」と語った．それは，Linuxが認知されたということと同じに，その世界が大きく変わったということでもある．

同様に3年後は分からないというのが今回のCOMDEXでの正直な印象である．Linuxが市民権を得る過程では，Linux自体が変質していくことは当然である．しかし，「ビジネスには興味がない」というライナス・トーバルスの言葉がビジネスに興味のある人たちによって忘れられていくことは悲しいことである．

（平成11年11月22日受付）